

剣士のいくりりカル
vivid!

シャイニングピッグEX

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

男子だが特別枠を設けられDSA Aに出ることになった男が一人。

その男は予想以上の問題があり、ヴィヴィオだけでなく多数の人を振り回していく。

目次

第一話	1
第二話	12
第三話	28
第四話	50

第一話

コロナとりオが練習を切り上げた後。いつもの練習場にてヴィヴィオはノーヴェに話があると言われ残っていた。

「男子からの特別選手……?」

「ああ」

ヴィヴィオの疑問を持った言葉に頷くノーヴェ。

「でも、男子は男子で剣闘大会みたいなのあるんじゃないかなかったつけ?」

「まあな。関係ありといえはありなんだが」

普段はスパツと話すタイプのノーヴェ自身の歯切れが悪い。何か問題があったのだろうかとヴィヴィオは思う。

「……そんな危ない人なの?」

「お前が想像してるとは違う感じでヤバイやつだな、ありや。相当な問題児だぜ」

「それでその人がどうして?」

「簡単にいうと実力がありすぎる、殿堂入り、上に訴えてD S A Aに出たいと抗議、それが通った、て感じだな」

ツツコミ所がなかなか多くて頭が痛くなってくる。

「易々とこういう言葉を使うもんじゃないってのを承知でいうけどな・・・ありやまさしく『次元世界最強の剣士』だわ。年齢関係なしにな」

「えっ、そんな強い人が来るなんて、ライバル出現だったりする?」

「剣がどれだけ上手くても魔法や身体能力には関係ないだろ。それにドがつくほどに初心者だぞ」

「ふーん・・・そんなことよりせつかく一人で残ったんだし練習続け」

「の、前に。なんとそいつをあたしに受け入れて、コーチしてほしいって申し出があつてだな」

「それはその、災難でしたね?でもなんで私にだけいったの?」

「アインハルトにも、コロナにも、リオにも言わず。ヴィヴィオにだけこんな風に伝えるのはなぜか。疑問に思うのは当然だった。」

「話なげーな。入るぞ」

突然話を中断して男が入ってくる。

「おいおい、これから（不本意だが）あたしがコーチをやるんだぞ?少しくらい言うこと聞けよガキが!」

「なんでオレがお前なんかの言うこと聞かなきゃなんねーの?」

目上の人物をモロに見下した態度。確かに『問題児』で間違いない。

「・・・あんま言いたくはなかったんだけど、ヴィヴィオに最初に任せようとしたのはお前なら真摯な対応ができると思ったからだ」

フン、と鼻をならずとその男が言った。

「別にオレはあんたらに接待されに来たわけじゃないんでね」

「そうかわかったよ新入りボーヤ」

「オレにはガラナ・デイスターヴって立派な名前があるんだよ。よろしく頼むぜお二方」

「ずいぶんといい挨拶じゃねーか。あたしはノーヴェ・ナカジマだ、ノーヴェでいい。よろしくな?」

「そうかわったよナカジマ」

態度があまりにもあんまりなのでノーヴェはキレそうになっていた。だからと
いって知り合いから紹介されたのにそれを無下にしない程度には大人だったが。

「えっと、ヴィヴィオです!よろしくお願いします!」

「ははーん、お前が。こりやまた」

「?」

「あーまだいいわ。それじゃあ顔見せましたな」

「って待てよ！お前には常識ってもんがねーのか！」

そういうノーヴェの反応も当然だ。こんなコーチと選手の関係が、そうでなくても人間同士こんな淡泊かつ雑な関係はあつてはいけない。

「だってオレの目的の人物いなかったしな。あんたの指導なんて受ける気にもならねーし帰る」

「いくらなんでも初日にそりやねーだろ。おいヴィヴィオ、相手してやれ」

(これ私には『ボコセ』って聞こえるんだけど！どうすればいいのー!?)

「え、あ、はい。私はさつきまで練習してたので、アップはいいです。ガラナさんは？」

「いらん」

「いいんですか？」

「オレは天才だからそんなもんなくてもいいつつてんだよ」

(これ、選手というか人として大丈夫なのかな？心配だけど)

さすがのヴィヴィオも少し苛立ちがあつたのでノーヴェの意図を汲み取り、ここは現実を叩きつけることにする。

「それじゃ、三分間の五本勝負。勝ちが決まろうとなんだらうと最後までな。逃げは許さねえから」

「いうまでもないだろ。剣士が勝負を投げるかよ」
ヴィヴィオとガラナがリングに立ち、向かい合う。そしてお互いに試合のために準備を整える。

「では、手合わせ願おうか。手加減はしないぜ、ヴィヴィオ先輩？」

「はい、お願いします」

「起きろ、トラディメント・ハート。セットアップ」

「いくよクリス、セイクリッド・ハート！セーッとアープ！」

方や黒色の剣を、方や虹色の羽を纏うと変身が完了する。

「へーえ、ずいぶん凝ってるじゃないの」

「そっちこそ、騎士みたいですね、その装束。・・・先手は譲りましょうか？」

「オレは天才だぜ？そっちこそいいのかよ」

「では遠慮なく！」

（あ・・・れ!? 戦闘態勢に入った途端すごい気迫で隙もない、けど攻めなきや始まら
な——）

「あ、ちよつといいかなカジマ」

「んだよ？」

「単純な疑問だが、武器っていいのか？」

「その場で魔力で作ったならいいはずだぜ」

「じゃあトラディメント使えないのか・・・まあいいだろう」

「あの、すみません。こっちからもいいですか？ガラナさん」

「何か問題でも？ルールあんまり知らないから反則行為があるなら遠慮なくいつてくれよ」

「大人モード、使わないんですか？」

「確かに推奨はされてるみたいだが・・・選手にとってそれは取捨選択すべきものだ。違うか？」

「わかってるなら、いいんですけど」

「子供が大人の言葉使ってカツコつけてるつもりかー？天才くん」

そんなノーヴェエの言葉を無視する。しかし単純に無視したというよりは集中して耳に入らなかったというほうが正しいようだ。

（トコトン可愛いげのねーやつだなあ、それにしてもさっきの構えといいいうだけのことはある・・・か？）

ノーヴェエにも材料が少な過ぎてまだ読みきれないが、最強の剣士という称号が安くないのは確かだ。

「必殺剣『はじま』』』」

魔力で剣を作り出し、右手で持つ。D S A Aのルール上剣士には必ず必要な行程だ。

「それじゃあ、仕切り直して。こつちから、いきますっ!」

先ほどと同じ強い圧力を感じるが、それに臆せずボディを決める。

(・・・あれ? 雰囲気にして、身体思ってたより軽——?)

大人モードを抜きにしても、これはおかしいのでは? そうヴィヴィオは思った。だが試合中に考えている暇はない。

「・・・」

ガラナとしても、油断したつもりはなかったが、簡単に一本とられてしまう。

そのままガラナの防戦一方で試合は進む

二本目、剣で防御するもヴィヴィオにそれを破られる。

三本目、今度は回避しきろうとするがラッシュで捉えられそのままダウン。

四本目、距離をとって逃れようとするがそれもうまくいかず。

(見込み違いか構えは明らかに特別なそれと思っただけにな)

特別とは、裏を返せば異端。結局素人かと思いき最後五本目は期待も萎んでいた。

「どう? これでも初心者には負けないでしょ」

「・・・」

「見てて、どう思いました？」

「・・・そうだな、才能ねーだろ。お前」

「おい試合中に、口が過ぎるぞ！大体ヴィヴィオは——」

「いいよノーヴェ、続けさせて！」

「オレは本気でD S A Aやるつもりでここに来たんだ。お前みたいに才能ないやつ
の相手してる暇ないし、あつても嫌なんだよね」

「・・・それじゃあ、ガラナさんはD S A Aに勝てるってこと？」

「それについては結果は見えてるよ」

「でも、そんな『才能のない人』にガラナさんは負けそうなんだよ？」

「その通りだ。だからこそ最後はさすがにエンジン入れさせてもらうぞ」

これまで以上にガラナの気迫が高まる。ポーカーフェイスも相まって次どう来る
かはまったく読めない。

「よつと・・・」

突然ヴィヴィオの方に剣を振り投げる。それもとても緩やかな放物線を描いたも
のだ。

(隙だらけじゃ!?)

ヴィヴィオは咄嗟に剣を叩き落とそうとする、がその前に剣はガラナの右手に収

まっていた。

速い。それ以上に、いつ動き出したのかがわからずそれはヴィヴィオにとって大きなプレッシャーとなる。

しかし今の動きは見えている。落ち着いていれば防御してカウンターが狙えるだろう。

ガラナが右足で大きく踏み込むと剣を構える。

（——来る！）

強い攻撃を予想して防御に移るが、頭を襲ったのは弱い衝撃。石でも投げられたかのような。

剣を頭に投げられたのである。

彼の真意はともあれ、ヴィヴィオは一瞬怒り、それに任せて拳を振るう。おそらく当たらないが、戦術を乱すことはできるはずだ。

「うぐっ……!?!」

と、思ったのだが。適当に狙った拳が運悪く（運良く?）クリーンヒットしてしまふ。回避した先に、だ。

「ぐ、5-0でヴィヴィオの勝ち……っ」

ノーヴェが肩を震わせて笑っている。仕方がないことである。あれだけ大口叩い

て、さらに煽って回避も噛み合わずストレート負けなのだから。

「どう？これでも才能のないやつ相手はしたくない？」

「ああ、したくないね」

「そっか。じゃあ、これからしていただきって頼むようになるまで頑張るね」

「一生こねーよ、天才相手に何をいってんだ。それと馴れ馴れしいぞ」

「いいよね、ガラナ。これから友達になろうよ！」

「あほらしい。勝手にやってろ」

「おい、ガラナ！」

「なんだよナカジマ」

「とりあえず、あたしに教わってる間は勝手は許さないからな。それと、挑発行為はやめろ。減点されるぞ」

「なんでだ？ちよっとしたもんだし、やられるほうが悪いんだろーが。あんなのそれに、減点されようと関係ない。オレは天才だからな。ガラナはそう付け加える。」

「・・・そこは百歩譲って認めよう。だが！勝つ気はあるんだよな？」

「勝負にわざわざ負けにくる剣士がどこにいる」

「・・・わかった、信じるぞ」

「何はともあれ、私と一緒に頑張ろうね！ガラナ」

ここまで二人の話もどこ吹く風のガラナ。D S A Aに出場する選手としてはまぎれもなくトップクラスの問題選手だが、はたしてこの先ヴィヴィオ達はどうなってしまうのだろうか。

第二話

「しかしあいつ、全然練習でねーな、どこで何やつてるんだか」

ノーヴェエがガラナにメールを送る。ヴィヴィオが練習試合をやるから見に来てはどうか、という旨のものだ。

期待してのものではなかったが。

(どうだろうと、あたしがすっかりしないな。あいつが言うこと聞けばそれでよし。聞かないなら聞かないにしても……だ)

→朝早く、図書館にて

「おはよう、ガラナ。久しぶりだな」

「ああ——決勝後の打ち上げ以来か、レイ」

図書館でガラナの隣に座つたのは、三年連続剣闘大会二位のレイである。

彼と対戦した記憶はどの試合も鮮明に思い出される。一位と二位だからといって、優劣が簡単につくものではなかった。

それでもガラナは自分が最強の剣士であるという自負があつたが、それは友情には

関係のない話。

「悪いなー、お前に勝ち逃げされたからって勝手に勝手にむくれて」

「勝負ならいつだって受けるさ。オレ達の仲だろ」

それだけのことを言えるほどにお互い三年間競い合ってきた。

「——ま、そうさな。それより調べたいものってのは？」

「格闘技について、最低限知っておく必要があるかと思つてな」

「なんだ、お前のことだからもうガツチガチに理論構築済みかと思つてたんだけど違うのか」

「大方の有名選手の情報はサーチ済みだ。だからっていくら対策を組んでも基礎がなければどうしようもないだろ」

「その通りだな。お前の身体能力なんてたかが知れてるしやっぱり効率的なのはそれだ」

「それに……」

レイは黙つて続きを促す。

「最近ちよつと会いたくないやつがいてだな」

「まあ、上手く付き合つてけよ。誰も彼もと仲良くなれるなんてそんな世の中ありえないんだからさ」

「わかってるよ、そんなこと。それよりとりあえずこれくらいの本運び頼む」

「とりあえずじゃなくねこれ。多くね？」

長い付き合いのレイにはこの先の展開がわかった。

「図書館だからな。それに、D S A A なのは女子の花形スポーツでこのご時世、かなり有名なだろうよ」

「俺のこと呼んだの本運び、その間にお前は研究か。いい身分だねえ」

「後で飯おごるから。な？これ持ってきてくれ」

「飯なら仕方ないな・・・うわやばいくらい多い」

肩をすくめた承の意を示すとレイは椅子の上に荷物を置いて立ち上がり、去っていく。

メモを片手に探し物をしてうろうろする姿はN O 2 剣士には似合わず少年らしい。しかしそんなことをさせている間に自分のやることをやろうと思った。

(・・・さて、考えるか)

私物のノートを開くと鉛筆を片手に思考に没頭し、理論を構築する。

そうしているとすごい早さで時間が流れていくのだが――

「・・・ずいぶん集中してたぜ。最低限って指定されたものはもう見終わってたっぽいし、少し休憩しねえ？」

「つと、レイか。悪いな、何度も往復させて」

時計を見ると、もう二時間も経過していた。確かに少くらい休んでいいだろう。荷物を持つと外へ出る。そして自販機で飲み物を買うと一服する。

「お前つて昔つかからカフエイン中毒だよな。それも微糖の」

「考え事の息抜きにはちようどいい。お前もどうだ？」

「俺甘いの好みなんで」

「しかし少し混んできた・・・確か今は昼前、しかも休日。だからか」

「そうだな、残りやりたいの済ませたら昼どつかいこうぜ」

お互いに飲み終わると再び図書館に入る。席はギリギリ

「・・・なあ、あの子」

「うん？服装からして女の子だな。よく見えないけど」

顔が見えない。それだけ本を持っているということはすごい力持ちだろう。雰囲気も鍛えてそうなアスリートのそれだ。だが、目の前で無茶をされるのも困るので声をかける。

「その人、もしよろしければ少しお持ちしましょうか？」

「いつものごとくイケメン発言はいいけど見栄を張るなよ」

うるさいぞレイ、と軽く返すと思ったより元気な返事が帰ってくる。というより、

つい最近聞いたことがあるような？

「あ、大丈夫です。もうすぐそこに席をとってあるので・・・」
そういつて机の上に本をドンと乗せる。

「あの子は三人組かー。でも混んできてもう他に空いてないし、入るか」

「・・・邪魔したら悪いだろ」

「空気読みすぎてヘタレな悪癖どうにかならねーの？俺達だつて二人組だ、雰囲気とかも問題ないだろ」

「お前がいうなら、いいけどよ・・・」

「どことなく歯切れが悪いけど、どうしたんだ？」

そういうことで座ることにするが、いきなり座るのはさすがに躊躇われるので声をかける。

「相席いいですか？」

「あ、大丈夫で・・・ガラナ？」

「やっぱり、ヴィヴィオか。そうだろうな」

「知り合いか、なら話は早——」

「よし、帰るぞレイ」

一瞬でレイの頭を掴むと連れていこうとするが力づくで止められる。

「待て待て落ち着け。お前に限ってそんな仲悪い友達いねーだろ？」
ヴィヴィオの方をちらりと見ると明らかに引いている。

(・・・お前ウブだからいつかやるんじゃないかとは思ってたけど、何した？あんな人当たりの良さそうな子に)

(違う、そういうあれじゃない。俺からはもう話しただろ?)

(そりゃそーだけど！だからってあんなに引くって普通以上になんかあるとか・・・)

「えっと、あの。あなたがガラナさんですか？」

「えっと、とりあえず待て、誰？」

「そうだよな、図書館ではお静かに・・・」

「コロナって言います！ファンなんです、サインお願いします」

「・・・」

ガラナは一瞬にて凄い顔をしてしまっている。

「三年前、初めて剣闘大会に出てる時からずっとかっこいいと思ってる・・・」

「お前も有名になったもんだなー？おらっ」

「三年前つてことは有名になる前、デビュー当時から知ってるだろ。茶化すなよ」

なんだこの状況は、とガラナは叫びたかった。図書館の中なのでそんな訳にはいか

ないが。

「えっと、もしかしてそっちはレイさん？」

「あ、うん。どした？」

「リオです！三年前、そっちにいるガラナさんと決勝で戦ってる時から——」

「や、待つて待つて。とりあえず、座つて一旦落ち着こう。話はそこからでもいいでしよ」

「……その通りだ、レイ。何を調べてるんだ？」

「ええーつと、古代ベルカの歴史だよ」

相変わらず妙に馴れ馴れしい、それでいて近すぎるわけでもないヴィヴィオ。わざとそうしているのは明白だったが訂正するのは諦める。

「……トラディメント。手を貸してあげてください」

デバイスのトラディメント・ハートに話しかける。

『分かった。でも、手を貸すというのはどういう意味だ？普通にか？』

周りから見れば何をしているか分からないだろうが、ガラナはデバイスと相談をしていた。

『判断は任せます』

『お前の分は必要ないな？』

『後からで構いません』

『了解した』

「そのまえに、えっと、ガラナさんは何を調べているんですか？」

「調べものなんか無い。小説を借りてただけだ」

そこは素直に情報収集してた、でいいんじゃないか。レイはそう思ったが親友の面子を守るため黙っておいた。

そこからは二人の雰囲気を感じたのか黙々と時間が過ぎていった。・・・それに巻き込まれたコロナとリオは気の毒なことこの上ないが。

くそして昼過ぎく

『しかしここまで言葉遣いが古風かつ不遜ですまないな、ヴィヴィオ君。分かりにくくなかったか』

「そのくらい気にしませんよ。むしろもつと教わりたくらいです！・・・いいデバイスだね、ガラナ」

「俺のデバイスだ、当たり前だろ」

「それじゃあ、私この後少しスパがあるんだけど。いつしよに行かない？」

「・・・お前と？何で？」

「じゃあ俺に免じて頼むわ」

「引っ込んでろ、レイ。——お前が言うなら仕方ないか」

(ありがとう、レイくん)

(いいっていいって、気にするな。……こいつも本当はいくつも本当はなんだろうしな)

『お前の言うとおりに、中々見込みのある娘のようだ』

『見込みだけでは、意味はないと思います』

『ははは、お前が言うとおりの重みがあるな。だがあれは伸びるぞ』

『……そうでしょうね』

『お前に限って忠告する必要はないだろうが、一応な』

「なら早速向かうか」

「あ、待ってください！」

ファンとして特別な感情を抱いているのがバレバレな様子でコロナがガラナの後ろをついていく。

「——あ、用事もう終わったんですか？レイさん」

「気を使わせて悪いな、ガラナのやつが——えっと、リオだったか？」

「はい。でもいいですよ、一生懸命にしているみたいだったので」

「ま、いい加減あいつも真面目にやってくれるのだろ——多分」

(そこは言い切ってほしかった……)

そして一同は——奇妙な集団だったが——目的地へと到着した。

そこにいたのは旧ナンバーズ軍団＋スバル、ティアナ。(ガラナは知るよしもないが)

「なんだ、来たのか。ガラナ」

「気が向いたので」

「——ま、今はいいか。せっかくだし見学してけよ」

「それで、紹介してくれる子って？」

「ああ、場所は抑えてある。行くか」

そしてまた移動。向かった先にいたのは——

「アインハルト・ストラトスです。よろしくお願ひします——つてあれ？」

「お前は……」

一瞬の沈黙を疑問に思ったコロナが声をかける。

「二人はお知り合いですか？」

「ああ、家ぐるみで付き合いがな。……しかしお前はただ戦闘が目的なだけだと思っ

ていたんだが、心変わりか？」

「そういうガラナさんこそ、一生を剣に尽くすのが本懐、みたいな人じゃないです

か……」

「——ここはお互い追求しないことでどうだ？」

「そうですね、そうしましょう」

「・・・よくわからないけどまとまったみてーだな。それと、レイも観戦希望か？」

「せっかくですし、お願いします」

「分かったぜ、始めるか」

ヴィヴィオとアインハルトのスパーリング。4分1ラウンドで格闘のみの拵め手なし。非常に分かりやすいルールだったのだが・・・ヴィヴィオはあっけなく負けてしまふ。

『あの子の戦闘、どう思いますか？』

『霸王の系譜だな、どことなく面影がある』

『才能の塊ですね・・・ヴィヴィオとは正反対だ』

『だが勝てるだろうか？お前なら』

『もちろんです。心に剣がある限り』

「・・・じゃあ今回はここまでにして次回練習試合ということだ——」

「まあ待つてくれよナカジマさん」

「だからノーヴェって・・・もういいか。前みたいな醜態は晒すなよ？」

「そうしようと思えるほど弱くはないな、アイツは」

そういつてリングへ上がるガラナの雰囲気は以前の対ヴィヴィオの時とは違う。以前は言い様のない圧迫感だが今回は逆に静かな感じだ。

「ルールは変更して構わないか？ハル。1R4分間、ただし魔法もありで戦法は自由。デバイスの使用はなしだ」

「こちらは問題ありません」

「全く、あたし置いてきぼりで進めやがって……ええい、もう勝手にしろっ！開始！」

ガラナは必殺剣『一』で右手に剣を展開すると超速スピードの連続移動でアインハルトを攪乱しにかかる。

「……そこっ！」

！（これに初見で対応するか……やつぱりヴィヴィオの時ほど手を隠す余裕はないな……！）

剣を左手に持ち変えるとアインハルトのカウンターを弾く。

「……レイさん、あれっで」

ヴィヴィオにとつてはショックな光景だろう。声をかけられたレイはそう思いながらも答える。

「あいつの利き手は左手だ。しかしいきなりつてのはビビったぜ」

しかしそういつて目を向けるとむしろヴィヴィオは楽しそうだった。

(・・・いい才能だ。アインハルトとは違う意味で、な)

「せー、のっ!」

アインハルトがまたしても移動をとらえると畳み掛けるようにラツシユへ移る。始めは対応していたガラナもたまらず剣を後方へ打ち飛ばされてしまう。それだけでなく体も耐えきれず後方へ飛ばされる。

(……で攻め——ッ!?)

しかしガラナの手から離れたはずの剣が手へ戻っていた——否。至近距離にいたアインハルトにはそう考えるしかなかったが、リングの外の観客には何が起きたかよく分かっていた。

ガラナが魔法で『剣を伸ばした』のだ。そしてそれを掴んでから即座の対応。どう考へても吹き飛ばされた直後にそれをやるのは至難の技。まるで剣がどう動くか理解していたかのような流れであった。

しかしアインハルトも負けてはいない。反射的な後退で最悪の事態を避ける。

「ふう——……………」

(…………この感じ、来るか!全力勝負!)

ガラナはアインハルトが『あがった』のを感じ取っていた。

「読み合いはなしだ．．．——『受けて勝つ』」

「——霸王断空拳！」

（先程のヴィヴィオとの対戦、さらにここまでのスピード勝負から考えられる間合

い・威力——『視えた!』）

対応しての剣での防御。

だが、アインハルトはその防御がくることを当然分かっていた。戦いでガラナが嘘をつくはずがないからだ。故に考えは一つ。『剣ごと撃ち抜く』

「ああああああっ!」

加速しての拳は剣へついにぶつかり——

はしなかった。

外れた。あるはずの剣から。

（．．．幻影魔法?!この状況でっ!）

騙された、という恨みを大した人だ、という称賛が上回る。

「終わりだな——「まだですっ!」．．．!?!」

断空拳で全身から前へ加速した勢い。普段ならこれは相手に乗せるものだ。だがこれを今回は自分に乗せる。

間違いない転ぶが、久しぶりの熱い勝負。この『上がりきった』瞬間を逃すはずは

ない。

「二重、霸王！断空拳ツ!!」

(つ、間に合え・・・!)

アインハルトの拳の先がガラナの体を掠める。だが間に合った。

「ライジングテレポート!」

その刹那、黒い雷光がリングへ、それもアインハルトの後ろへ走った。もちろんそんなはずはないのだが、少なくとも全員がそう見えた。

「ぐっ・・・」

さすがのアインハルトも完全に前に倒れこむ途中で隙をさらしている。ここから打てる手はない。

「・・・本当に終わりだ。せっかくだし持っていけ、必殺剣『鍾』」

「・・・」

アインハルトは倒れたまま立ち上がらない。

「ここで止めだ！おいアインハルト、大丈夫か!？」

「軽く脳を揺らしたただけだ、それも一瞬。すぐ治る」

『・・・及第点だな』

「ガラナ！いい勝負だったよ！やればできるじゃない！」

「やっぱりガラナさんはすごい……！」

「ちよつと！レイさんのがすごいよ！」

反応は三者三様だった。

（あいつも育ってるな、前の決勝より——でもやっぱり……）

「そうだな、とりあえずおめでとう。しかし技のキレが落ちてりやよかつたのに前より上がつてるとかマジかー」

「そういうなレイ、お前ならすぐに追い付けるだろう。目的は果たした、帰るぞ」

「……ふう、落ち着いてきました。対戦、ありがとうございました」

「ああ、こちらこそ。手荒にして悪いな、ハル。埋め合わせにまた今度出掛けよう」

「はい、予定が空いたらまた連絡します」

その瞬間空気が凍りついた。こんなに易々と男が女を誘うなんて。いくら若いからといつてもこの場にいる全員が衝撃だった。

「あれ？お二人様はどういう関係で？」

その凍結を打ち砕く犠牲となったのはレイ。

「何って、幼なじみですよ？——あれ、いつてませんでしたっけ？」

皆が聞いてないよ！と叫びガラナはこの後問い詰められることとなったのであった。

第三話

―練習場（リングの外にて）―

ガラナはノーヴェに呼び出されていた。さすがに毎回毎回説教をうまくかわせるほど世の中は甘くない。

「お前って不器用っぽい性格なのに、女友達なんていたのな」

「・・・腐れ縁だ。最近は疎遠だったのは確かだが」

「しかし、いい加減ちよーつと話を聞いちゃくれねーか？ 大体あたしはお前のコーチなんだぞ」

「ならもう話を聞く理由はないな。もう新しいコーチの申請は出してある」

「は？ どういうことだよ、それ」

「剣闘大会で師事してたコーチがいる以上、元よりあなたに師事してもらう必要はなかった。あくまでも移行にあたる形式的なものだと初めから思っていたし、色々考えた結果の結論だ。何を言っても無駄だ」

「可愛いげのないやつ・・・」

(とかいって、元々必要ないことくらい分かっていただろうに)

「ま、お前がどうするかはお前の勝手だが、いつものメンバーでもうすぐ合宿をやる」

「それだけか？」

「あの高町なのはも来るぞ？」

「・・・」

(レイは喜ぶかもしれないな)

「友人を誘って、問題ないか？」

「え、お前の友人？なんかバケモノ呼んでくるんじゃないだろうな」

あんたに言われたくはない。言うのと殴られそうだったのですぐに引っ込めた。

「つまりOKだな。日程はデバイスに送れば分かる。では話が以上なら、これで」

「まてまて。実はお前のために、練習試合を入れたんだ。相手は快く受けてくれたぞ。予定は今日の17時から・・・」

「・・・聞いてないぞ」

「言っていないからな」

「そう言ってニヤリと笑うノーヴェ。時計を確認するともう16時。負けろといっているのだろうか。」

「相手は、ヴィクトーリア・ダールグリウン」

名前を脳内の情報と照合する。

（都市本戦準決勝進出者でオレが最警戒すべき人物の一人。手を抜いてる余裕は無さそうだ）

「少し外に出てきます」

「逃げるなよ？」

勝手に言っていればいい、そう思った。自分はデイスターヴ家の名がある限り逃げるわけがない。

・・・と、いう会話をして55分、いやそれを今過ぎたところだった。

（ぜ、全然来ねえ）

「・・・申し訳ありませんが、相手の殿方はまだいらつしやないのですか？」

（露骨にイラついてるよな、どーすりやいいんだ!?!）

「失礼します」

「来、いや誰だお前は!?!」

「彼のコーチを引き継ぐものです。ライト・デイスターヴ。よろしくお願いします」
似ているので一瞬間違えた。まさかの新コーチだろうか。そして名字、家族だろうか。いや、それより本人はと現実に引き戻される。

「あ、これはどうもよろしく、じゃなくて、とにかくあいつは？」

「さあ・・・？」

「さあつて、おいおいおい」

こんな会話をしている間に三分経過。したその時物音をたてながら件の人物が入ってくる。

「も、申し訳ありません！」

「そういうのはいい。アツプは、済んでるようだね。入つて」

「はい」

(こいつには敬語なのかよ)

そう思つて悔しがっているノーヴェの内心を見透かしたのか、ライトは声をかける。

「隣にどうぞ。あなたにもこれから世話になりそうですから」

「・・・はい、ありがとうございます」

「殿方が約束に遅れかけるといふのは、正直どうかと思ひますが」

「プレツシャーをかけるお嬢様は苦手かな・・・」

『おいガラナ！威厳はどうした！』

「！はい、今は試合だ、細かい話は後にしろ」

「?・・・まあ、いいでしょう」

「健闘を祈ります、お嬢様」

(こちらは、セコンドというよりも執事に見えるな。やっぱりいいところの出か) そのお嬢様がなんでこんな格闘技をするのかと疑問は尽きないが。

「審判はエドガーさんにお任せしても?」

「ええ。では——こちらはヴィクトーリア・ダールグリユンです。よろしく」

「ガラナ・デイスターヴ。手合わせよろしく」

「ルールは3ラウンドでのライフ初期値は15000。1ラウンドは5分間。問題はありませんか?」

「ないわ」

「ない」

「では——始め!」

まずは剣を作り出すといつものように小手調べ。

ヴィクターに向け剣を投げる。

一見カウンターのチャンスに思えるが、動かない。

ガラナは超加速で剣へと追い付くが、それを確かに目で追っている。

(ヴィヴィオほど甘くはない、か)

気にせず斬りかかる。

ただし、そのままではなかった。

(一瞬で剣を左手に持ち替えた！)

しかし、これならまだかわすことができる。

反撃には移れず、こちらのペースに持ち込めたわけではないが、それは相手にとつても同じ話。

(この感じ、ほぼ同格だな。だからこそ狙いも同じ。最初は様子見に費やすつもりか)

そこからはお互い、一進一退で攻防の入れ替わりを繰り返す接戦だった。

(ライフ残量は……ようやく1万を切ったか。埒が明かないな)

(この人の動き……雑で型がない、のに強い。才能を見せつけるようです、が……この違和感は一体?)

スピードはすごい。攻撃もけして軽くない。だがそれ以外に目立つことはなにもない。

(一流なのは確かですがこれではただの一流……それに要所要所の動きも普通すぎる。これが王者、ガラナ・ディスターヴ?)

「ずいぶん固いな、その守り」

「雷帝の装甲にその程度では通じませんわ……まさかこのまま、1セット丸々様子見に使う気？」

「それはお互い様だろう。それに、こっからじゃないか？勝負つてのは」

(そろそろ『合つて』きた、いける——やる)

(……来る！)

雰囲気の変化を察し、ヴィクターは集中力を以前よりも高める。

「必殺剣・『絶』」

(ノーフェイクでの攻撃なんて、甘——あれ、なぜ、体が動かない?)

「チツ、さすがにその防御じゃ通りは甘いか」

「ここので1R目終了。」

お互いのライフは——ガラナが9400、ヴィクターが9600。

「いい調子ですね、お嬢様」

「私の調子は、ね……」

「ここまで押せています。最後にイレギュラこそありましたが、まだまだ修正の範囲です」

(……ですが、想像したよりもまるでライフに差が開かない)

「ここまででの攻防でヴィクターはほとんどの攻撃を受けてきた。」

正確には、受けさせられていた。

「（これまで回避を試みる度に、どういうわけかタイミングがズラされていた？）そちらから分かったことはある？」

「残念ながら、なにも」

（正直、期待はしてなかったけど情報もなし。しかし、事前の『天才』という評価といい——何だか妙なものを感じるわ。ガラナ・ディスターヴ）

「そ。じゃあ次はこちらから叩いてみるとしましょう」

その時、ガラナ側では。

「もう実力は十分に分かりましたよ、コーチ。後は勝つのみです」

「ふむ……じゃあその単純な実力についてはどう思うかな？」

「正直驚きました。現時点では推測の域を出ませんが男子基準ではベスト5以上はあるでしょう——地力なら自分と同格と考えて差し支えないかと」

「勘も戻ってるみたいだね。それに、僕からの課題も十分克服できてるようであったよ。ただ、手を温存しすぎるくらいは直したほうがいいね」

「……つまり、どういうことでしょうか？」

「せっかく授けた奥義なんだ、使ってきなよ。カードというのは隠すことだけじゃなく、見せることにも価値がある」

（君のタイプからして、もうすこし思いきつてもいいはずなのだけどね）

「なるほど・・・それ以外の策に関して、必要でしょうか？」

「必要だと思う？」

「使えなくもないですが、今やつても効果が薄いかと。確かに装甲は厚いですが、攻撃が通っていないわけではない。普通に攻めるのが一番だと思います」

「分かっているじゃないか。ダメージレスでいうとそこまで負けてない、それに速度はこちらに分がある。稼ぐだけ稼いで、策を練るのはそれからいい」

「おーい、ガラナ」

「なんだよ、ナカジマ」

「やさぐれてんなーおい。他のやつらが応援、来たぞ」

「げっ、ヴィヴィオ」

「うん、ヴィヴィオだよ。ライフは、互角かな？」

「が、ガラナさんの試合がこんな近くで見れるなんて——ああ——」

「・・・まだ始まったばかりだよ？」

「観客に夢を与えるのは選手の特権だが、今日は練習試合だ。それに実力差もない。そこまで期待はするなよ」

感極まって倒れそうになっているコロナとそれを支えるヴィヴィオ。それに、アイン

ハルトまで来ていた。リオは、レイのライバルである自分は氣にくわないのだろうか、分らないが来なかったようだ。

「お前まで、揃いも揃って・・・ヒマか？」

「いえ、それとレイさんから伝言です。『終わったらアイス買ってこい』って」

「よし速攻で終わらせ・・・られはしないな、うん。せめて判定勝ちしない程度に努力しよう」

「しかし、あんなテキトーな指示でいいんですか？」

「前コーチのノーヴェさんですか。うちの甥っ子が世話になったみたいですね」

「はは、それほどでもないです。・・・やっぱり、親族の方だったんですね」

「ええ。あの子のことは生まれてからではないですが長く、そしてよく見てきました。その逆もです。自分の言いたいことくらい全部分かってるでしょう・・・それに」

「それに？」

ライトは一呼吸おくと続ける。

「彼は最強の剣士ですから。ただ信じてれば、それでいいんです。どんな相手だとしてもね」

「たまにポカするときは、口を出しますけど。そう付け加えるとライトは笑っていた。」

(・・・なんだか、コーチとして負けた気になっちゃうなあ)

「では、第二R開始です！」

「そう来たか」

「こ、これって・・・遠い!？」

ヴィヴィオが言った通り、ヴィクター側はかなりの距離を開けている。完全に魔法戦闘を仕掛けるつもりだ。

これだけの距離があつてはいくら速いガラナの剣でも見抜かれてしまうだろう。

「残念だが、俺の剣は変幻自在だ」

剣を魔力で伸ばして対応するガラナ。しかしそれを見てヴィクターはニヤリと笑う。

「・・・ですが、それだけの剣を振るうにはあなたのフィジカルでは時間がかかる!」

大剣を降りかぶっているガラナに対して一瞬で距離を詰めたヴィクター。隙だらけのガラナに向け攻撃をする、が。

「ライジング・テレポート！」

上へと避けたガラナ。しかしそれは悪手だ。

(かわしましたか・・・ですが、空中で身動きはとれないはず!)

「六十八式！兜割！」

「・・・」

空中のガラナを叩き落とした——と、思ったのだが。

ライフ9400

（残像か！本体を探している暇はない、それにこの状況なら本体に余裕はないはず！リング全体まとめて攻撃する！）

「かくなる上は！」

（なんて魔力だ・・・！）

「百式・神雷！」

「ちっ！」

リングの隅ギリギリから低い体勢でチャンスを伺っていたガラナだが、あまりの魔力に吹き飛ばされる。

「そんなところにいるとは、それにその動き——かすり傷ですまされましたね」
ライフ9400↓1000

本人いわくかすり傷でこれだ、自身のフィジカルは理解していたがガラナは少し絶望した。

そしてヴィクターは空中に浮いたガラナをここで落とそうと追撃を仕掛けようと

する。

「これでトドメで!？」

「まだだな! 『グングニル』」

直前で槍を創造しての投擲。

(飛びながら撃つてフォームはメチャクチャ、こちらを見てるわけでもない、けど、これは、当たる!?)

ヴィクターの選手としての経歴は素晴らしいものだ。それ故の直感が当たることを予感した。

だが、攻撃のためこちらも飛び上がった今では避けられない。

ライフ9600↓8000

(けっこうな魔力つき込んだ、つもりなんだが・・・長い道のりだな、全く)

「小癪な・・・ですが、偶然は2度は続かない!」

(まずい、お嬢様の機嫌が・・・)

「偶然かどうか試してみようか？」

「えっと、アインハルトさん、ノーヴェ・・・さっきの攻撃、どう思う?」

「理屈の上では、可能でしょうが・・・」

「ほぼ実践じやみないな。良くてラッキーパンチ、普通は試合を動かすようなこと

はない。だけどだからこそ、相手にとっては警戒しないわけにはいかない」

「ラツキー？でも今の攻撃、急所を見もしないで狙っていたような・・・？」
それに答えるのはアインハルト。

「それはないでしょう。ただ驚きなのは火力ですね。あの人の厚い装甲から1発で1000以上削り、しかも魔力もあまり使わない技のようです」

「さて、いくか」

「させません、速攻で落とします！」

(・・・乗ったなバカめ)

(たとえ目で追えない攻撃でも始めから防御態勢をとつていれば！)

「必殺剣『鍾』」

「がっ、あ———？」

「まさかこの技まで切らされるとは。ああ、強いよお前。『覚えておく』」

ライフに変化はない。だがヴィクターの様子を見ればライフ以上になんらかの異常を巻き起こしていることは読み取れた。

「・・・アインハルトさん、今の技って？」

「情報をあまり与えるのは不公平なので雑にいますぐ、回避不能の技『絶』、防御不能の技『鍾』、そして必中の一撃『グングニル』です。・・・ここから先、この3択で攻

めるつもりでしょう」

「半年ぶり生で見ちゃったー！ ガラナさんの黄金パターン！」

「えっ、それって・・・すごく強くない!？」

「ですが、彼もチャンピオンとはいえプロというにはまだ入り口。あくまで子供です」

まあ、それだけじゃないのも確かですけど。アインハルトはそう思った。

「たかだか同格に負けるようなやつが3連続チャンピオンになんてなれるわけ、ないだろう」

ガラナはそういうと剣に雷を纏わせる。装甲を抜けない分、今までよりも魔法偏重の戦法へ変えるつもりのようなのだ。

「ライトニング・チャージ」

(ダメだ、止められない)

(嫌な予感が当たりましたね——早くこのラウンドよ終わってくれ・・・)

(この一撃でできるだけだけ追い詰める!!)

「必殺剣『重』」

ガラナが剣に魔力を込めると一瞬でヴィクターの体を貫く。

減少値——

ライフ9000↓5200

(ダメージが想定より大きい——これは1撃の重みではない!)

(全力チャージに加えて三連撃入れてこれか——本当に長い道のりだぜ)
ここで2ラウンド終了。

「……どう思います? アインハルトさん」

「最後の1撃……装甲を抜いていましたよね。衝撃の伝わりが違いました」
(やはり彼の手の広さは異常の一言です)

「でも、これでもガラナの方が有利だとはいえないんじゃない?」

「確かに、ガラナさん相性悪そう。タンカー型は元から苦手みたいだし」

「それも含めて、これからどうするか。見所だと思いますよ」

そして、ガラナ達の休憩中。

「さて、まずいね……相性の悪さがここになって出てきたよ。ここからどうする?」

「このまま3択で攻め、『重』で決めます。この試合で読まれることはないでしょうが……読んだところでどうしようもないパターンが一番かと」

「手段の一つではあるね。他は?」

「剣を解放するのはルールのにどうなんでしょう?」

「ただのデバイスってだけならセーフだったんだけど、よりにもよってインテリ

ジエントだから無理だね」

「そうですか。ではやはり、このまま行きます。ですが決して保守的な意味ではないですよ」

「分かっているよ、問題ないんだろう？行ってくるよ」といい

（練習試合だからむしろ痛い目を見てもいいくらいなんだけど、才能のある子を育てるのは可能性が多すぎて苦勞するなあ）

そして少し前、ヴィクター側。

「あの技の前ではお嬢様の装甲はもはやあてにならないかと」

「フィジカルではこちらが上……だけど彼の剣技にまだまだこちらは対応できていないのがネックね」

「ですがただやみくもに近寄るよりはずっとマシです。このまま遠距離から牽制を続けますか？」

「……分らないことだらけな以上、攻めます。練習試合なのだから必要なのは勝ち負けではなく、相手の全力を見ることよ」

ライフではヴィクターが圧倒的に勝っている。ここは慎重に一撃を決めにいく。

3ラウンド目開始。

再び間合いからはずれた距離で戦う両者。

またしてもしばらくは読み合いが続く。牽制を交えての駆け引きだ。

先手を切ったのはヴィクター。詰め寄ると全力で斧を振り下ろそうとする。

それを察知したのかガラナは剣を右手に持ち変えると構えをとり回避する。

「・・・必殺剣『風』ッ!？」

乱れることのない流れるような動き——だったのだが、途中で切れかけた。危なっかしい。

(まだあの技習得してないんですか!?)

練習試合とはいえないきなり博打に走ったガラナにアインハルトは驚く。

タイミングはズレたが技は(結果的に)成功。ヴィクターの攻撃の軌道を読み、カウターの態勢に移る。

ヴィクターは焦る。まだだ、まだ攻撃は命中したわけでも完了したわけでもない。中断は可能だ。

(このシチュエーションなら、かわせる!たとえ目に見えない攻撃だろうとなんだろうととりあえず剣の間合いから出れば隙ができるはず!)

そう考えてのバックステップ。

「巧いな。この速さは膝を抜いて動く高等技術。この歳の選手に読まれるようなことはないだろう」

そして、またも槍を創造しての投擲。

回避は不可能、というよりそもそも回避を読まれていたのだ。

ライフ5200↓4100

いきなりグングニルで攻撃というパターンを想定していなかった自分の甘さだ。ヴィクターはそう思った。

「リップサービスのおつもりで？」

(通用しただろうよ、相手が普通の選手だったらな)

(・・・やはりどこかが妙。彼は一体?)

「!」

「?どうしたの、アインハルトさん」

「彼にしては珍しく、一気にカタつけにきましたね」

え、とその場にいたヴィヴィオがつい声を漏らす。

「必殺剣——」

(何で来る!?!まだ予測するには材料が足りなすぎる!とりあえずここは勘でも、防
御!)

「『絶』、なんてな」

「しまっ……」

ただ口に出し、構えをとった。それだけ。だがそんな行動も極限状況では切り札となる。

「必殺剣『鍾』、派生の『重』」

防御を崩してからの装甲無視ダメージ。

ライフ41000↓2000

「手は緩めない！『グングニル』！」

ライフ20000↓10000

（次で仕留めきる！）

「サンダー・チャージ——」

「終了！試合終了です！」

「・・・不本意ではありますが、引き分けです。ありがとうございました」

「そう、なるな。対戦ありがとうございます」

「い、いやー!!すごいです！さすがガラナさん！」

「ああ、ありがとう」

「・・・ええ、かつこよかったですよ」

「おう、サンキュなハル」

「ほら、ヴィヴィオさんも何か」

「うん、すごくかつこよかったよ！」

「お前に応援されても嬉しくねーよ」

「わたしが応援してて嬉しいの！だからいいの」

「・・・勝手にいってろ」

真面目にいつているのに鼻で笑われる。それでもヴィヴィオはまだまだ諦めていないようだった。

「これは案外、根深い問題かもね・・・」

「それを解決するのが、あたしたちでしよう？」

「そうですね。ノーヴェさん」

「それと一ついいですか？」

「と、いいますと？」

「・・・あいつの、ガラナの『秘密』話してもらえませんか？」

「・・・知らないなら、いいません」

彼自身がいわないなら。そう言外に含んでいるのをノーヴェは察し、とりあえずは引くことにした。

そこに、ドタドタと物音を立て、少年が一人。

「・・・どうした、レイ。騒がしいぞ？」

「ああ、いや、ガラナ、一つ困ったことがあつてな・・・」

「(この時期、わざわざオレに言ってくること?) 男女の交流戦か?」

「そうだよ、お前の抜けでな。それで今、男子のトップランカーは不味いことになつてゐるんだぞ!」

「は、はあ・・・? すぐ行く」

そして、残されたアインハルトたち。

「なんとというか、嵐みたいだったねー」

「真面目にやりさえすれば、頼れる人なんですが・・・」

第四話

「・・・さて、第70回、70回!?取り乱しました、すみません。とにかく会議を始めます。司会は私、ガラナ・デイスターヴが「長い。巻くぞ」ひどい・・・とにかく、男子ベスト5から考えましょう」

「本人紹介は客観的な視点とはいえないので代理紹介します。第一位ガラナ・デイスターヴ。まあ強さは言うまでもないですが、ルール上交流戦に出していいのかはグレー」

「ではここからは私が。第二位レイ・フォード。攻防一体の珍しいタイプ。三年連続決勝で敗北。例年ならまず一位と呼ばれている」

「「決まりじゃね?」「」」

大勢の声。気持ちはわかる。

「問題は攻撃がどうしても地味なこと。剣士の持ち味は派手なムーブなのにあんまり地味だと、ファンの方々が、ね」

「・・・ですね。では第三位クロム・グレース。強い、もしかしたら才能が誰よりあるんじゃないかってくらい強いんだけど、精神性からかムラがありすぎる。もしダメな

時にあたつたら男子がナメられる」

「ああ？ ナメられるだつて？ この俺が？」

「どこが、つて聞かない辺り自覚ありますよね。はい次。第四位、空中戦が真骨頂のスカイフィード・ヴェーラ。色々と突つ込みどころがありすぎる。なんだよ剣士なのに得意なの空中戦つて」

「仕方ないだろ！ 親父は空前魔導師なんだよ！」

「戦闘系の職種だとそもそも扱が少ないよ。空前魔導師の子で空中戦得意な剣士つて何人いると思つてるんだ？ 死に長所じゃないか。はい次。」

「私d「進行を邪魔するな」あ、はい・・・」

「第五位、とにかくバ火力。そのバカ戦法から引き分けからのサドンデスが多すぎる。相手にしたくない剣士ランキング堂々一位のバカ。バカランキング一位のバカオブバカなバカでもある」

「・・・あんた俺のこと嫌いすぎない？」

「よくわかつたなバカ。毎回毎回リングぶつ壊すあげく遅延しまくるから頭下げて下手すれば弁償しなきゃいけない相手に好印象抱くわけないだろバカ」

「なんだとバカだと！ バカつていうほうがバカなんだぞこのバカ！」

「わかつた、わかつたよ！ 後でまた、な？」

「・・・で。まあ、そういうわけで、どうする？」

「二二位（レイ）でよくね？」

知ってた。何でオレ呼んだんだよ。

なんて夢を見た。

というオチならよかつたなと今でも思う。

「・・・言ってる場合じゃないでしょ」

ん？と思った。なんだかおかしい。自分は伯父と自分の二人暮らし。なのに下から人の話し声がある。それも電話口からのそれじゃない。単なる来客とするには早すぎるし親しすぎる。

「ん、おはよう、伯父さん」

前日は先ほど書いてあつた会議の後に帰宅、そのまま用意をして就寝。

「はい、おはようございますガラナさん」

「・・・いや、なぜお前がいる？」

そこにいたのはアインハルト。まだ朝の四時。これはまずい。色々と。

「昨日からいましたよ？」

「泊まり？親の許可は？」

「もらってます。そうでなくても、うちの両親は仕事が多いです」

「あ、そう、いや、そういう問題でなくて」

「案外奥手だよなあ、ガラナ。兄さんには似てないよ」

「あ、伯父さん。おはよう」

「うん、おはよう。こんなかわいい娘が傍にいてくれるなんて、この子も隅におけないね?」

「ちよつと、やめてくれよ」

「・・・?」

当の本人であるアインハルトはまるでなんとも思っていないようだった。ガラナにとつてこれは地味にシヨック。

「・・・案外強敵みたいだね、頑張つて」

「はい、ガラナは強敵です。でも、負けませんから!」

(ダメだなこれは。というか、いるんだねえ実際こんな人)

「しかし、いつもこんなに早くに起きてるんですか? 眠いです・・・学校の用意は?」
「学校は行つてない。自分のことは気にしなくていいから寝ていいよ、うん。つてまだ理由を聞いてない。伯父さん、これは一体どういうこと?」

「さあ? 君の自業自得じゃないの」

(オレが何かしらマイナスの影響を与えた相手? となるとノーヴェエが最有力か)

「……自分のことを監視する必要はないよ、ハル。やるべきことはしつかりやるさ」
「そうですか……ふあああ」

「やっぱ、寝たら？」

「そうします……」

のろのろと二階へ上がっていくアインハルト。

「まさかと思うけどオレの部屋で寝かせてないよね、伯父さん？」

「寝かすわけじゃないでしょ。もう8歳年取ったら考えようと思ってたけど、あの様子だと少しばかり強硬策に出ようかと」

「……」

「外堀埋めた方が早いかかと」

「おい」

「でも実際君も満更じゃないんじゃないや——いや、ごめん。今のは僕が軽率だった」
「分かればいいよ」

一瞬ついガラナが出てしまった険悪な雰囲気を感じたのかライトは話を変えることにした。

「いま悩んでる場合じゃないしね。大会までの時間もないんだし」

「大会で思い出した。そういえば、例の前コーチ提案の合宿に招待されてるんだけど」

「ああ、細かい準備とかは気にしなくても」

「そつちじゃなくて。伯父さんって『高町なのは』と知り合いなんでしょう?」

「・・・ああ、わかった、わかった、そういうことね。君の聞きたいことは」

「!」

「でも、話せないかな。そういう『約束』だから」

またそれが、と思った。自分の周りにいる大人の常套手段だ。自分は知りたいたいこと一つも知れやしない。

(といっても、まあ——仕方ないか)

それに関して抱くのは、諦めに近い感情だけだった。

「・・・でも、オレがD S A Aで言われた通りの結果を残せたら?」

「その時は、ご褒美を与えよう」

「わかったよ」

短く、冷たい返事を返すと会話を終わらせる。そんなことを今さら確認している場合じゃない。自分のすべきことをしなければならぬ。

「・・・行つたか——」

これはなかなか手間がかかりそうだね。頑張ってくれ、レイ君、アインハルト君、そして—— ヴィヴィオ君。

—そして3時間後—

突然インターホンが鳴った。

「伯父さん、来客みたいだけど相手は？」

「君の友達」

「友達……？ああ、レイか。すぐ行く」

「私も出ます」

この時間となるとさすがのアインハルトも起きて準備万端だ。学校の荷物を持っているのは不審だったが、そういえばレイとは同じ学校。一緒に登校するつもりなのだろうかと予想を立てる。

「ん、む……まあお前なら問題ないか」

そして扉をガチャッと開ける。

「おはよう、ガラナくん！アインハルトさん！」

「悪い、止められなかった」

「よし行つてこい」

「ちよ、何して——」

予想通りのレイは構わなかったが、目に入ったのがヴィヴィオだったのでついアインハルトを突き飛ばし、扉を閉める。

再びインターホンが鳴らされる。

(・・・今のはさすがにオレの対応が悪いわな)

「で、何のようで——突然だから仕方ないとはいえ、女の子同士でお姫様抱っこはやめたほうがいい。あらぬ誤解を受ける」

「・・・あ、そうですね、ごめんなさい。ヴィヴィオさん」

「う、うん」

(ハルは素かよ！)

「んでまあ、ヴィヴィオはお前と一緒に学校行きたいんだつてさ」

「いいよ、友達ならいるから」

「えー、でも学校行った方が楽しいよ?」

「そんなことより大事なことがオレにはあるの。なあ、レイ?」

ここで振られたら否定できないじゃねえか!というレイの心の声が聞こえそうだった。がここは我慢してもらおう。

「確かにそうなるかな」

「お前はオレと友達になりたいんだろ? そんなことは絶対にありえないから安心してろつて」

「『ありえないことこそありえない』よ?」

流しかけて少し驚く。今のはオレの選手としての信条だ。

「・・・レイ?」

「教えてないって。調べりやそのくらい出てくるから」

「なら、いい」

「とにかく、わたしはガラナ君といつか友達になるから。でも今日はいいや。いこ
う、レイくん、アインハルトさん」

「おい、レイ」

「なんだよ?」

「オレにメール送れるくらいにはそいつに絡まれない時間作つとけよ」

「うつす了解ー。じゃあ、またな」

「いつてらつしやい、気をつけて」

「・・・お母さん?」

「やめろ、鳥肌がたつ」

ハルはやはり天然すぎる。レイも笑ってるし。こいつは笑点が低いから困る。

「よかつたの?」

「今さらだ、放っておくさ」

「ならいいけど。もうそろそろいい時間だ、練習と行こうじゃないか」

それから、各々が自らにあつた時間を過ごす。そして、合宿当日。

「結局、レイさんは音沙汰なしかー・・・」

「ガラナさんも来ないのかな」

「このガチ勢どもが、もうすぐ始めるからな、油断すんなよ」

はあーいと気のない返事を返しつつも準備を整えるコロナとりオ。心配はなさそうだ。

「えっと、あの二人は来ないんですか？ ヴィヴィオさん」

「あのあと毎日話そうとしたし—— 進歩はあるけど、そこまでの手応えは」

「ったくあの悪ガキがー！」

「誰が悪ガキだつて？」

「あ、ガラナ！」

「お前ら、どうやってきたんだ？ 犯罪か？」

「さすがにそれは酷すぎるんじゃないかな、ノーヴェさん。それと、なのはにフエイトは久しぶり」

「あ・・・久しぶり、ライト！ もう大丈夫？」

「なんだかんだで、ね」

「いやーガラナさんがいると元気百倍だよ！」

「いいや、レイさんのおかげだつて！ね、ヴィヴィオ？」

「あ、あはは・・・」

「そういえば自己紹介がまだか。ガラナ・デイスターヴです、よろしく」

「レイ・フォードです。それなりによろしく」

片や無愛想、片や適当な挨拶。アクが強いが、それはなのは仲間内ではそうでもなかった。

「キャロル・ルーシエです。それに飛龍のブリード。身長が1.5センチ伸びました！伸びました!!」

強調するのそこかよ。そう思っても誰も口に出さないのは優しさだ。

「エリオ・モンディアルです」

「ルーテシア・アルピーノ。こう見えても歴史には詳しいのよ？」

「あの、後ろにいるのは？」

誰も触れようとしないものをいい加減認識させようと気遣うコロナ。

「るーのーの大切な召喚獣。アインハルトも、それにガラナくんも警戒しなくて大

丈夫」

「はい」

「うす」

（ばれたか……やっぱ相当やるな。あくまでまだ推定しかできないけど、来た甲斐があるってものだ）

「わたしは高町なのは」

「私はフェイト・テストアロッサ」

「いやあ、お二人は有名人だしみんな知ってますよ」

いつもの軽いテンションでなのはとフェイト二人に話しかけるレイ。だが親友のガラナにしてみれば内心喜んでいるのはバレバレだった。

「！えっと、君がレイ・フォードくん？」

「はい、それが何か？」

「そうだね、後でまた話そう？」

（——良かったなレイ、目をかけられてるみたいだぞ）

友人を内心応援するガラナ。だがそれよりも今は大会に向けて自分のことだ。

「それじゃあ、みんなご飯食べる前に川で特訓だ！」

「でも、レイ君とガラナ君だけは別メニューね」

「それって、どういうこと？フェイトママ？」

「正直二人は、完全にプロレベルだからね。体の動かし方くらいはマスターしてるだろうし」

「あー、いいです。俺はあっち行くんで、ガラナだけ特別メニューで」

「ライトはそれに賛成？」

「問題ないよ」

そういうわけで、ガラナ以外は川でトレーニング。ガラナのみは大人に混じることになった。

「さて、ガラナ。自分の未熟なところはもうわかってるよね？」

「オレが能力に『未覚醒』なことですか？」

「その通り。強引にでも目覚めさせようと思ってね。だからガラナには、というかここにいるみんなに一つ提案をしたい」

大人組もまたライトの言葉に耳を傾ける。

「特訓合宿のメイン、ガラナには事前に話したよね？」

「わたしが教えちゃった」

（なのはなら仕方ないか・・・）

全員がそう思った。

「それで、その一戦目なんだけど。子供組vs大人組にするから」

「!？」

空気が凍りついた。ガラナも凍りついた。果たして、ガラナの運命は・・・？